

[高岡市]

ものづくり・デザイン科 学習資料

伝統工芸
高岡漆器

青貝塗

あ お が い ん り

高岡漆器の代表的な技法のひとつである青貝塗は、漆黒の、深みのある光沢のなかに、鮮やかに虹色を放つ青貝を用いて、様々な圖案を表現する独特の技法です。

古くは唐山水に代表される中国的な圖案、日本的な花鳥風月の圖案、そして洋風のインテリアにマッチするモダンなデザインのものまであります。ここでは、指物木地による文庫の製作工程を見てみましょう。

製作工程一覧

木地工程 (指物木地)							塗り工程									青貝工程					塗り工程							完成					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11					12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		25	26	27	28	
原木	製材	乾燥	木取り	梓組み	底入れ	天張り作り	仕上げ	木地仕上り	刻苧	木地がため	布張り	布目ずり	地付け	地研ぎ	切粉地付け	切粉地研ぎ	錆地付け	錆地研ぎ	中塗り	中塗り研ぎ	文様描き	貝切り	置目	青貝付け	毛彫り	小中塗り	貝むき		小中研ぎ	上塗り	上塗り研ぎ	胴ずり	すり漆

※数字は工程の番号を表しています。



©Fujiko-Pro

塗り工程



8. 刻苧

節、キズなどを埋めたり、木地の接着部の補強のため、刻苧掻い込みをします。
(刻苧=もち米でつくった花粉と生漆、木地の粉、刻苧綿を練り合わせたもの)



9. 木地がため

生漆を木地面にすり込み、木地がためを行います。



10. 布張り・布目ずり

木地の補強と、木やせを防止するために、のり漆で布張りをを行います。布張りが乾燥した後、布の上から下地漆を布目にすり込み、布目を埋めます。

塗り工程



11. 地付け・切粉地付け

火山灰などを原料とした地の粉で漆下地を作り、桧で作った木べらで地付けをし、その後、切粉地付けを行います。
(切粉地＝地の粉と砥の粉と生漆を練り合わせたもの)



12. 切粉地研ぎ

平滑な所は粗砥石を使い、曲面もしくは細かい部分はサンドペーパーを使って、空研ぎし地肌を整えます。



13. 錆地付け

錆地漆を桧べらを用いて平滑にへら付けします。乾燥後に、もう一度、繰り返します。
(錆地漆＝砥の粉に水と生漆を練り合わせたもの)

青貝工程



17. 模様描き

製品の形・大きさに応じて青貝模様の効果を考えて図案を描き、薄美濃紙に写します。



18. 貝切り

①メキシコ鮑貝 ②白蝶貝 ③夜光貝
④鮑貝 ⑤黒蝶貝



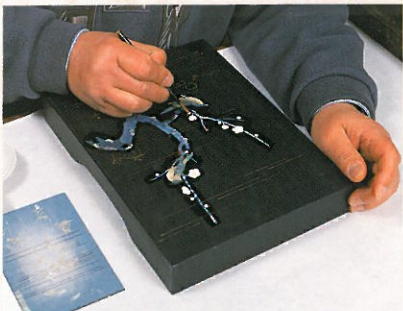
截ち切り

直線の截ち切り法で、長い線ではぬい針を使用します。



突き切り

三角・四角・短冊・菱などは角度を決めて小刀または平鑿で一気に突き切ります。円弧・波形は、蓮華鑿の丸みを利用して突き切ります。



20. 青貝付け

模様付けの範囲に薄く漆を刷毛で塗り、置目にしたがって、断ち切った青貝を張り付けていきます。



21. 毛彫り

青貝の下地の漆が十分乾いてから、花のしべ、鳥の羽毛や人物の顔、衣紋など、針を用いて筋彫りし、繊細な表情をつけていきます。



22. 小中塗り

青貝の周囲を固めるとともに、漆のたまり、ちぢみを防止するために薄く、やや固めの漆を刷毛塗りします。

塗り工程



14. 錆地研ぎ

砥石または耐水ペーパーで錆付け面を水研ぎします。特に平面では砥石研ぎで平滑な面にします。



15. 中塗り

下地面の調整のため、中塗り漆を用いて刷毛塗ります。1回目の塗りをし乾燥した後に、もう一度塗ります。
(中塗り漆は吉野紙で小さなゴミ・ホコリを濾して使用します。)



16. 中塗り研ぎ

「油桐」と呼ばれる、樹木を焼いて作った漆専用の研ぎ炭で、水研ぎし、平滑な面を作るとともに、次の上塗りの付着性をよくします。



針抜き

花・鳥や人物などの自由曲線の模様は、針で抜いていきます。



打ち抜き

桜の花びらや花心等は、型棒を使い、金づちで打ち抜きます。



19. 置目

薄美濃紙に写した図案の裏面に、絵漆で置目描きし、これを中塗り面に写します。その後金消粉をまいて鮮明に写し取ります。



23. 貝むき・小中研ぎ

小中塗りがよく乾いてから、青貝表面の漆を小刀、または鑿を用いて削り取り、さらに全面を炭研ぎします。



24. 上塗り

上質の呂色漆を吉野紙で十分に濾し、全面を仕上げ塗ります。





25. 上塗り研ぎ

上塗りが充分乾燥した後、研ぎ炭^{にやうねん}で入念に研ぎ、さらに目の細かい呂色炭^{ろいろすみ}で仕上げ研ぎを行います。



26. 胴ざり

上塗り研ぎの炭傷^{すみきず}をとるために、油砥^{あぶらと}の粉^こを綿^{わた}または布^ふにつけて充分に磨き、半艶状態^{はんえつじょうたい}の仕上げ面にします。



27. すり漆

最上質の日本産生漆^{きやうし}を、全面に充分すり込み、吸い込みムラがなくなってから、綿^{わた}・揉み紙^{かみ}を用いて余分な漆^{かき}をふき取って乾かします。



28. 呂色仕上げ

すり漆の乾燥後、なたね油^{つゆ}と角粉^{かくこな}を器物につけ、指先あるいは手のひらで磨くと漆特有^{しやうとく}の光沢と深みが増してきます。このすり漆^{すりし}、磨き工程^{みが}（27、28）を3回程行います。



完成



高岡の優れた職人の技

武蔵川 貢山
大正3(1914)年生まれ
青貝普賢菩薩 漆塗飾鉢
製作 昭和58(1983)年
高4.5×径39.0cm
高岡市美術館蔵



小学5年	組	氏 名
小学6年	組	
中学1年	組	